

留学生の口頭発表に対する評価を探る

— 本本当に伝えたいことが伝わるためには何が必要か —

三浦 香苗 ・ 深澤のぞみ

はじめに

本研究は、金沢大学留学生センターの大学院予備教育日本語研修コース¹⁾で行っている口頭発表プロジェクトに関するパイロット・スタディである。

上記のコースでは、一般的な日本語教育と平行して、コース修了後の研究活動に適應するための訓練プログラムをとりいれている。日本語力ゼロの段階から始めるコースであるが、それなりに、留学生が将来専門の講義を聞き、研究発表をし、レポートを書くための下地となる教育を目指している。具体的には、自分のテーマを決め、それに関して日本人にインタビュー調査をし、それを基に客観的な分析をして、最後に口頭発表を行う。このプロジェクトワークを本コース開設（1995年10月）以来行っている。口頭発表はコースの仕上げとして実施され、関係者にも出席を願って評価や講評をしてもらっている。この口頭発表の目的は、留学生が自分で選んだテーマについての調査を行い、客観的分析に自分自身の見解を加えて発表することである。従って内容が聞き手にうまく伝わるのが肝要である。しかし、このようなタイプの学習では、殆どの場合、最終プロダクト（口頭発表）が発信された時点で教師も留学生も満足してしまう。そして、内容が正確に聞き手に伝わっているかという最も基本的なことがあまり検証されることは少ない。また、留学生による発表であるため日本語力のみが注目されがちで、内容面はさほど重視されない傾向がある。

このような特質のためか、口頭発表に対する評価が担当教師の間でも一致しないことがある。また、担当以外の教師や関係者のコメントを見ても、評価の視点がまちまちである。

そこで本稿では、留学生の口頭発表では伝えなかったことが正しく伝わっているか、何が一番聞き手に問題視されるか、そして本本当に伝えたいことがうまく伝わるためにはどのようなことが重要なのかを、聞き手の反応から考えていく。それをもとに口頭発表の指導のしかた、さらに口頭発表を含むプロジェクトワークの運営についても併せて考察する。

I. 口頭発表の背景：プロジェクトワークの構成

日本語研修コースでは、約半年の間（実質的には17週間）ゼロ段階からの日本語教育を行っているが、コース開始後3カ月目あたりから、口頭発表のためのプロジェクトワークを始める。初級レベル後半にさしかかったところである。毎週2コマ程度をこれにあてる。口頭発表までの具体的なプロセスは以下の通りである。

1 準備段階

インプットとして、読解教材を読んだり、数字の読み方や図表を使った表現の練習をしたり、実際に行われたアンケートを研究したりする。その一方で、インタビューの練習のためにミニ・アンケート調査活動をクラス内で行い、その結果をパソコンで処理する。表計算ソフトでの集計、作図、あるいはワープロを使った作文などの練習を行う。また、人前で話す練習として「私の国」「休みにしたこと」などの身近なテーマのミニ・スピーチを行う。

2 インタビュー調査

各自プロジェクトのテーマを考え、それに合わせてインタビューする項目や対象を決める。インタビューをするのに必要な表現を練習したり、パソコンによるインタビュー調査の質問票を作ったりする。その後、インタビュー調査を実施し、集計や結果の分析をする。必要なら、関連文献や資料を読む（日本語でなくてもよい）。

3 口頭発表

口頭発表のアウトラインを書き、原稿を書くのに必要な表現導入後、実際の原稿を書く。担当日本語教師が必要に応じて添削をする。また原稿を書くのと並行して、口頭発表のための発音練習（プロミネンスのつけ方、キーワードなどの言い方など）をする。口頭発表の時に使う資料（OHPシート、ハンドアウトなど）を作る。予行演習を一度行った後、留学生関係者などを招待して、最終口頭発表を行う²⁾。

なおこの口頭発表は、コース修了後すぐに専門課程での研究活動に入る研究留学生の特殊事情を考慮して、いわゆる「青年の主張・スピーチ大会」に優勝するようなものではなく、研究者の「研究発表」の練習となるように意識して指導している。

II. 調査の方法

1 調査の目的

本稿で行った調査は、次の二つのことを明らかにすることが狙いである。1) まず留学生の口頭発表の内容がどのくらい正確に伝わっているかを調べる。2) そしてうまく伝わらない点はどのようなものなのか、また伝わらない原因は何なのかを考察する。以上を、聞き手（日本語母語話者）に対して聞き取り調査を実施し、その結果をもとに考察する。

2 調査対象者

調査対象者を二つのグループ（AとB）に分けて録画を見てもらい、その後で聞き取り調査を行った。

グループA：

二人の留学生が行った二つの口頭発表の録画（録画1と録画2）を、日本語母語話者10名（日本語教師5名、日本人学生5名）に見てもらい、聞き取り調査をした。

グループB：

留学生が行った口頭発表から発音の問題点などを取り除くために、同じ口頭発表を一人の日本語母語話者が発表した録画を作った。録画1'と録画2'である。これらは、留学生が行った口頭発表を文字化した原稿を基にして、日本語母語話者がほぼ忠実に再現したものである。それを別の日本語母語話者11名（日本語教師5名、日本人学生6名）に見てもらい、同様の聞き取り調査を行った。

そして、それぞれの聞き取り調査の結果を比較した。

3 調査に使用した口頭発表の内容

タイ人の男子学生による「金沢大生の通学方法」と、マレーシア人の女子学生による「金沢大生の行ったことのある外国について」という二つの口頭発表を調査に用いた。3-2でも述べたが、それぞれ留学生自身が発表した口頭発表の録画（録画1と録画2）と、同じものを日本語母語話者が再現したものの録画（録画1'と録画2'）の二種類を調査に用いている。

次にそれぞれの口頭発表の内容や性質について、以下に述べていく。なお、各口頭発表の SCRIPT は参考資料に示した。

1) 録画1「金沢大生の通学方法」…これ以降、「通学方法」と略す。

この口頭発表の主題は「通学方法の便利さ不便さを決めるものは何か」である。調査

方法を簡単に説明した後、学生の住居地域、季節と通学方法との関連について言及し(但し、これらの項目についての説明は不十分である)、冬の乗り物別の便利さと不便さを分析している。そして、これらのデータを客観的に分析して、「徒歩や自転車などで通学する人は不便だと感じている人が多く、バスや車は便利だと感じている人が多い。通学方法の便利さ、不便さを決定する変数は乗り物の種類だ」という結論を導きだしている。

またこの発表では、発音の誤り、言い直し、無駄な繰り返しなどによる聞きにくさの傾向があり、提示された資料のグラフや図は6種類で、詳細でサイズも小さかった。

2) 録画2「金沢大生の行ったことのある外国について」…これ以降、「行ったことのある外国」と略す。

この口頭発表は、「金沢大生が行ったことのある外国について話す」と始まっているので、一応これが主題だと言うことができるであろう。この後、海外に行ったことのある金沢大生の人数、場所、目的、海外に行ったことのない学生については、行きたい国、目的について調査をしたことを述べた。その結果を簡単に説明している。そして、自分がマレーシアで出会った日本人留学生が言葉の勉強だけしかせず、文化を知ろうとしなかったというエピソードを紹介し、最後に「人気と情報は違いますが、アジアにももっと目を向けて欲しいと思います」と結んでいる。

一つ一つの段落は単純明解でわかりやすいが、それぞれの段落の脈絡は殆ど無い。マレーシアでの経験と「日本人はアジアに目を向けて欲しい」という結論は密接に結びついているが、全体としてはそれまで説明してきた調査と結論の繋がりはない。

使われたグラフは3種類の単純なもので、音声面は、発音の誤りもあったが比較的流暢さがあって聞きやすかったことが特徴である。なお、この口頭発表は、発表会での聴衆の評価が非常に高かったものである。

以上、調査対象者と調査に使用した録画について述べてきたが、これを整理すると表1のようになる。

表1 調査対象者と調査に使用した録画

	調査対象者	使用した録画
グループA	日本語教師5人 日本人学生5人	録画1 タイトル「金沢大生の通学方法」 (タイ人留学生自身が発表したもの) 録画2 タイトル「金沢大生の行ったことのある外国について」(マレーシア留学生自身が発表したもの)
グループB	日本語教師5人 日本人学生6人	録画1' 「金沢大生の通学方法」 (留学生の口頭発表を文字化した原稿に基づいて、日本語母語話者が発表したもの) 録画2' 「金沢大生の行ったことのある外国について」 (同上)

4 聞き取り調査

調査対象者には、簡単にこの口頭発表が行われた背景と目的を説明した上で、二つの口頭発表の録画を見てもらい、その後一人ずつ筆者らが面談の形で聞き取り調査を行った。(グループAには録画1と録画2, グループBには録画1'と録画2')

なお、今回は、さまざまな項目に分けたアンケートや評価票に記入してもらうことを敢えて避けた。そして調査対象者から、口頭発表を見ながら考えたことや感じたことをなるべく沢山引き出すような調査の形をとることを試みた。こちらからアンケートや評価票を配付することは、あらかじめ注目すべき項目を提示することになってしまうと考えたからである。

具体的な聞き取り調査の質問項目を表2に示した。

表2 聞き取り調査の内容

	質 問 内 容
1	それぞれの口頭発表について 主題は何だったか。
2	行った調査を用いてどのような分析を行っていたか。
3	発表者の結論は何か。
4	それぞれの口頭発表を見て、感じたこと、気づいたことは何か。
5	二つの口頭発表を比べて、どちらが優れているか。またなぜか。
6	二つの口頭発表を比べて、どちらが好きか。またなぜか。

Ⅲ. 調査結果と考察

1 各口頭発表の「主題、分析方法、結論」についての調査結果

1-1 「通学方法」発表

●主題と分析の中身に関して

「通学方法」発表の主題は何だったかという質問に対して、調査対象者の殆ど全員が「通学方法の便利さ、不便さが主題だ」と答えた。また、どのような分析をしていたかという質問に対しても、多くの人が金沢大生の住居地や季節と交通手段の関連に触れた上で、冬の通学方法が便利か不便かを調べていた、と答えていた。これは実際の内容とほぼ同じ内容で、ここまではよく伝わっていたことがわかる。

●結論に関して

ところが発表者の結論が何だったかという問いに対して、録画1（留学生による発表）を見た人の10人中4人がわからなかったと答え、録画1'（日本語母語話者による発表）を見た人でも11人中4人がわからなかったと言っている。合計すると21人中8人が結論をおぼえていない。

2-3の1)で「通学方法」の概略を記したが、この口頭発表では、アンケートで得たデータをモニターテレビで図表を見せながら客観的に分析していき、「徒歩や自転車などで通学する人は不便だと感じている人が多く、バスや車で通学する人は便利だと感じている人が多い」ということを言い、最後を「私のレポートによると、一番大切な変数は乗り物ということです」という言葉で結んでいる。つまり、「通学方法の便利さ、不便さを決定する変数は乗り物の種類だ」という結論を導き出しているのだが、聴衆は、結論がわからなかったと言った人が21人中8人もいるのである。

それはなぜであろうか。初級程度の日本語で発表しているのだから、発表の内容自体がさほど高度でないという点は調査対象者にも了解してもらっている。また、内容の詳しい分析は本稿で行なうところではない。そこで、内容以外の要素中、原因として考えられるのは、a. 図表が小さく複雑であったためのわかりにくさ、b. 発表の構造のメリハリが利いていなかったこと、c. 音声面での聞きにくさなどが考えられる。調査対象者にハンドアウトとして図表を渡してあったのだから、a. の問題は一応排除できるとすると、b. とc. の問題が大きいかと思われる。

●構造のメリハリを利かせるためのマーカー

b. で挙げた構造のメリハリを利かせるためのマーカーとなるものが、この口頭発表の中にあっただろうか。まず、主題が何かということは前述のようによく伝わっていた。それは、発音に問題がありはしたが、導入部で「金沢大生の大学への通学方法が便利か不便か、また最も大切な変数が何かを知りたいと思って調査した」ということを言っているので、聞き手もこれが主題だとはっきりかわったのであろう。次に、調査の結果と分析の中身の部分は、とくに「これから調査結果を述べます」などと言っていないが、徐々にグラフを見せて説明していくことによって、聞き手には何が行われているかわかったようだ。前述したように、大概の聞き手が理解している。特に構造を示すマーカーがなくても、この部分が本論だということは自明のことなのだろう。

さて、結論部分であるが、この箇所は特に前触れを置くことなく、あっさり言われていた。これから結論に入るということを示すマーカーがなかったため、聞き手には分析の続きのように思われたのだろうか。そのため、注意して聞けなかった、または印象が

薄かったのではないか。その結果、主題も分析の中身も大概の聞き手が把握できたのに、結論がわからなかった聞き手が多かったのではないだろうか。

●音声面

結論がわかったと言った聞き手にその内容を問うと、録画1（留学生自身による「通学方法」）よりも、録画1'（日本語母語話者による「通学方法」）の方が詳しく正確に答えられている傾向が認められた。このことは、録画1の留学生自身の口頭発表が音声面で聞きにくく、一方録画1'の日本語母語話者の方は聞きやすかったということを示していると思われる。また、聞き手に自由にコメントを述べてもらった際、録画1を見た人よりも録画1'を見た人の方がより具体的な内容に言及しながらのコメントが多かった。この点からも、録画1の留学生の音声面での問題が、聞き手による内容の把握を難しくしていたことが言えるだろう。

実際に音声面に問題があったことを指摘した聞き手もあった。それは録画1を見た10人（日本語教師5人と日本人学生5人）中5人で、興味深いことには、全員が日本語教師であって、学生は音声面の問題を指摘していない。留学生の音声的な特徴に慣れている日本語教師よりも、慣れていない一般人学生の方が、むしろ音声面をあまり問題視していない。ということは、一般人は留学生に完璧な日本語よりもむしろ外国人らしさを期待しているのではないだろうか。

1-2 「行ったことのある外国」発表

●主題と分析の中身に関して

録画2（留学生自身による「行ったことのある外国」）及び録画2'（日本語母語話者による「行ったことのある外国」）の主題と分析の中身を尋ねると、回答にばらつきが多く見られた。たとえば主題に関して、「海外旅行に行ったことがあるか、また目的は何か」というような答えから「アジアをどう考えているか」などといったものもあった。また分析方法についてもさまざまな答えがあった。

これはこの口頭発表の中で述べられていたことが互いに結びつきが弱く、客観的な論理の流れがわからないためであると考えられる。録画2'（日本語母語話者による発表）を見た人の答えの中には、「タイトルは金沢大生の行ったことのある外国とあるが、実は金沢大生の国際感覚の話だ」というようなものもあった。それを考慮すると、日本語母語話者の発表で音声面の問題がなくなったために、かえてこの「行ったことのある外国」発表の構成の矛盾がはっきり見えてきたのだと思われる。

●音声面

録画2（留学生自身による「行ったことのある外国」）を見た聞き手の中には、音声面の問題を指摘した人はいない。（1名の日本語教師が「発音もよくはないが、一応わかる」と言っただけである。）むしろ「流暢であった」（日本語教師）とか「聞きづらくなかった」（学生）とかの好意的なコメントがなされている。筆者ら担当教師からみると、録画2（留学生自身による「行ったことのある外国」）の留学生の音声面は録画1（留学生自身による「交通手段」）ほどの問題はないにしても、決して良くはない。しかし、全体的にテンポが良く、途切れや言い直しが録画1より少なく、個々の発音の誤りも録画1ほどひどくないというような点が「流暢、聞きづらくない」という評価につながったのだろう。

●結論に関して

「行ったことのある外国」発表の結論は何であったかと聞くと、わからなかったと答えた人は殆どいない。（録画2では10人中1人、録画2'では11人中2人、合計21人中3人がわからないと答えた）「旅行に行く国の文化などにも関心を持つべきだ」といったようなことを殆どの人が答えている。

1-3 「わかる」ということ

では、「わかる」というのはどういうことを指すのであろうか。聞き手に各口頭発表について感じたことを聞くと、録画1（留学生による「交通手段」）に関しては「結論がわからなかった」「聞き取りにくかったために内容がよくわからなかった」というものが多かった。前述したように主題や分析方法は比較的よく伝わっていたにもかかわらず、結論がはっきりしなかったために、聞き手は「わからない」と強く感じ、それが発表全体の印象になったようである。

それに対して、録画2（留学生による「行ったことのある外国」）と録画2'（日本語母語話者による「行ったことのある外国」）については、逆に「聞きやすく、わかりやすかった」「まとまっていた」というような反応が多かった。主題や分析方法のところがうまく伝わっていなかったにもかかわらず、「アジアに目を向けて欲しい」という結論が強く意識に残りやすかったために「まとまりがあって、よくわかった」と感じさせられたようである。さらに「留学生しか思いつかない視点だ」とか「納得できる」といった感想が多く出された。穿った見方であるが、アジアの中の先進国でありながらアジアに無関心な日本人という優越感と罪の意識の混合のような潜在意識を、この発表によって程よく刺激された心地よさの表れかもしれない。（「気持ちをくすぐられる感じ」（学生））

いずれにしろ、この口頭発表には聞き手の共感を呼ぶ主張が盛り込まれており、それが「わかった」という感想を強化したと考えられる。

また印象的なのは、「通学方法」の中できちんと「インタビューしたのが50人では不十分だということは承知しているが」と断っているにもかかわらず、聞き手のコメントの中に、調査した人数が少なすぎるというものがあったことである。ところが、「行ったことのある外国」については、インタビューをした人数や内訳などには全く触れないで簡単にグラフを示して説明しただけだったのに、「よく丁寧に調べてある」という意味のコメントが出されている。

これらの結果から見ると、聞き手に内容が伝わっているということと、聞き手が「わかった」と感じることは必ずしも一致しないのではないかと思えてくる。「わかりやすさ」というのが「正確な理解」を指すとは限らないようである。

2 二つの口頭発表の比較についての調査結果

二つの口頭発表の比較のために、「口頭発表としてどちらが優れていたと思うか」(以下、「どちらが優れていたか」と略す)と「あなたはどちらが好きか」(以下、「どちらが好きか」と略す)という二つの質問をした。これによって聞き手が持つさまざまな判断基準を浮かび上がらせようと試みた。そして、表3のような結果が出た。

表3 「どちらが優れていたか」「どちらが好きか」

	グループ A				グループ B			
	録画1 通学方法	録画2 行ったことのある外国	わからない	合計	録画1' 通学方法	録画2' 行ったことのある外国	わからない	合計
どちらが優れていたか	1 (10%)	8 (80%)	1 (10%)	10	4 (36%)	7 (64%)	0 (0%)	11
どちらが好きか	0 (0%)	10(100%)	0 (0%)	10	3 (27%)	7 (64%)	1 (9%)	11

まず「どちらが優れていたか」の問いに対して、留学生自身による二つの発表を見てもらったグループAでは、録画2「行ったことのある外国」が上手だと答えた人数が圧倒的に多い。(録画1：録画2 = 1：8) そして、その理由として録画2のわかりやすさを挙げた人が多い。これは、録画1の留学生の音声面の問題が大きく、録画2の留学生の音声の方が比較的聞きやすかったことがかなり大きな要因となっているのではないかと考えられる。

では、音声面の聞きにくさを取り除いたグループBではどんな結果が出たのだろうか。

グループBでは、録画1'「交通手段」の方が上手だと答えた人が増えている。(録画1':録画2'=4:7)理由を聞いてみると、こう答えた人たちは録画1'に関して、「数字や表を示した説明に納得した」「様々な角度から調べている」「この発表の目的に合っている」「小さく扱いやすい題材を使って、わかりやすく数字を出している」などのコメントを述べた。日本語母語話者による発表の音声面の聞きやすさによって、「交通手段」発表の客観性が少しは評価されたということであろう。「行ったことのある外国」には、先にも述べたが、論理の流れに無理があった。録画2'で日本語母語話者が発表して音声の問題がなくなったために、論理の流れの無理が顕著に現われてしまい、評価が下がったのだと思われる。

次に「どちらが好きか」の問いには、グループAでは全員が「行ったことのある外国」の方が好きだと答えている。グループでBも「行ったことのある外国」を支持している人の人が多い。その理由として、「わかりやすい」「内容に共感が持てた」「自分の意見をはっきり言ったのがよかった」などが挙げられている。特に、多くの日本人学生が「内容に共感が持てた」という意味のことを答えており、留学生らしい話題や意見に評価が集まることを表していると言える。

IV. 結 論

以上から、次のようなことが言えるだろう。

- 1) 音声面の技能が低ければ発表内容が正確に伝わらない。

発音や話すスピード、ポーズの入れ方、プロミネンスの置き方、イントネーションなどの音声面の技能は、発表内容が正確に細かく伝わるかどうかに影響を与える。

- 2) これまでにも指摘されていることであるが、主題、分析部分、結論などの構成部分が明示されていれば内容が伝わりやすい。
- 3) 「わかった」と聞き手が感じることで高い評価につながる。
- 4) 「わかった」と聞き手が感じるためには、必ずしも内容が正確に伝わっていかなくともよい。むしろ、i) 聞き手の共感を呼び起こす主張が盛り込まれていること、ii) 結論部分がはっきりして印象的であることが肝要である。

以上は、口頭発表で伝えたいことが伝わるためには何が肝要であるかを、聞き手側からの評価を通して考察して得た結論である。

これらのことから考えると、口頭発表を行なう場合、何のために行なうのか、何を伝えたいのかをはっきりさせ、その目的に合う発表するにはどうすればよいかを考慮する必要があるようだ。つまり、1)の音声面と2)の構造のメリハリの点に留意して準備

すれば、聴衆に感動を与え得ないまでも、発表の内容をよく理解してもらえらるだろう。内容に自信がなければ、4)のような聞き手の共感を呼ぶ主張を盛りこんだり、結論を印象的にして締め括ったりして工夫すればよいだろう。勿論、一番良いのは、内容面も充実していて、音声聞きやすく、構造のメリハリも利いていて、結論が印象的な発表である。聴衆を引き付ける主張があればもっと良いだろう。

V. 日本語教育プログラムへの応用と今後の課題

本コースでは、研修生全員が一定レベル以上の口頭発表ができるように、指導体制を整えているところである。即ち、内容面を充実させると同時に、発表の技量を研くことも行なって、聞きやすい音声と分かりやすい構成をもつ発表ができるように工夫している。そこまでは指導体制の強化と留学生側の意識と努力でどうにか達成できそうだが、それより上のレベルの発表、即ち聴衆に「よくわかった」と思わせる発表をするのはなかなか難しいようだ。

諏訪 (1995)³⁾は、「自分の発表を聴衆の側から評価する」ことの重要性を強調し、「聴衆が『見たいと思う』ことをまず考え、自分の発表の中から『見せたいと思う』こととの一致点を探して、それを強調」し、聴衆によくわかったと思わせることを勧めている。初級の留学生の口頭発表にそこまで要求できないという考えもあるが、基本姿勢としては聞き手からの評価を念頭に置いた発表を目指さざるを得ない。

では、初級日本語教育のプログラムの中で、どうやってそれを実現するか。まず、伝えたい内容を留学生にもたせなければならぬ。自分が興味をもち、面白いと感じるテーマを発見しなければならない。義務だからというのでは、発表したくないだろう。専門との関連性があれば、一層興味が湧くだろう。しかし、留学生は自分の初級程度の日本語では内容のあることが言えるわけがないと思込みがちである。そこで、まず、初級程度でもできるという希望をもたせるようにインプットを行なう。このインプットにも改良を重ねてきた。(2-1 準備段階参照)

その試行錯誤の中で筆者らが学んだことは、良いインプットを具体的なかたちで与えなければ、良い結果は得られないという、ごく当たり前のことであった。逆に言えば、良いインプットを与えている第3期生(1997年3月に口頭発表を行なう予定)からは良い結果が得られるはずであり、すでにその気配がある。

今後は、実用的な文を作るのに役立つ教材を増やしていく。それは同時に、テーマを見つけるための示唆ともなり、語彙・表現を拡張するためにも役立つ。読み教材、パラグラフライティング教材などに、初級であっても専門を意識した客観性を取り入れてい

かなければならない。使われる文型などが初級のものであっても、「主題」「分析部分」「結論」などの流れが明示されているものの導入をする必要がある。篠田（1986）では、実用文を一定のルールに従って正しく早くまとめる手順を提示しているが、本コースでも、一つのテーマを一定の枠組みに沿って展開していく練習を、プロジェクトのインプット段階で与えている。また、書くことと話すことは異なるので、まとまりのある話をする練習をプログラムに組み込んでいく。特に、話す場合、適確な箇所に構成部分の始まりを示すマーカーとなる文、句、語などがうまく挿入されているだけでわかりやすさが増すようなので、本コースでは積極的にそれを練習させている。

忘れてならないのは、口頭発表は音声によってなされるのだから、内容を聞き手に伝えるためには音声面の技能を高めなければならないということである。本コースでは一般的な発音の時間を毎日設けているのだが、第3期からは更に口頭発表のための音声指導の時間を設け、教材を作って対処している。発表のイントネーション、プロミネンス、ポーズなどのコツをクラス全体に教えた後、個別的に音声指導をしなければならない。特にキーワードの発音が悪かったり、プロミネンスをうまくつけられなかったりすると、せっかく良くできた内容も伝わらなくなる。また、発表は視覚的なものでもあるから、OHPシートの作り方、ポインターの使い方、目線のやり方などの発表技術や態度についても十分練習する必要がある。

本調査で扱った「行ったことのある外国」発表のように、論理性が欠如しながらも、聞き手の共感と呼ぶ主張のゆえに高い評価を得るのも悪くはない。しかし、本コースでは、皆にまず明快な論理性と聞きやすい音声を習得してもらいたい。そうすれば、発表内容を正確に伝えることができる。その上で、聞き手に深い感銘を与えるほどの発表ができたとする、それはその留学生の才能や個性によるものである。すべての留学生にそれは求められない。だが、「伝えたいことを伝える」レベルまでは、指導の枠組内で到達できるコースにすること、それがコース・デザインをする者の義務であると考える。

今後の課題として、今回はできなかった発表内容の分析を行なって、何が問題であるのかを更に探り、初級レベルの留学生でも達成できる「明快な口頭発表」を目指す所存である。

最後に、忙しい時期にご協力いただいた方々と快く資料提供に応じてくれた留学生に心からの感謝の意を表したい。

【注】

- 1) 金沢大学留学生センターは、1995年10月に大学院予備教育日本語研修コース第1期生を受け入れ、1996年4月には2期生、10月には3期生と、毎期半年(実質的には17週間)にわたる日本語集中コースを行ってきた。半年後には各々の専門課程に入るという予定で、ゼロ段階から始めて初級修了程度の日本語力にまでもっていくというハードなコースである。このコースの留学生は原則として非漢字圏出身者で、日本語を学習した経験がないか、経験があったとしても仮名の読み書きと非常に初歩的な文法を知っているという程度であるので、わずか半年の勉強では日本語の基礎力をつけるだけで精一杯である。しかし、半年後には専門領域の研究に入らねばならないという厳しい現実がある。
- 2) すでに第1期生5名(1995年10月～1996年3月)と第2期生9名(1996年4月～9月)が口頭発表を行った。現時点(1997年2月末)では第3期生10名(1996年10月～1997年3月)が予行演習を行なったところである。
- 3) 諏訪(1995) pp.19-20参照

【参考文献】

- 植村研一(1997)『口頭発表のコツ』『月刊言語』Vol.26, No.3, 大修館書店
 小河原誠(1996)『読み書きの技法』ちくま新書
 木下是雄(1981)『理科系の作文技術』中公新書
 小林康夫, 船曳健夫(1994)『知の技法』東京大学出版会
 斉山弥生, 沖田弓子(1996)『研究発表の方法 ～留学生のためのレポート作成・口頭発表の準備の手引き～』産能短期大学国際交流センター, 凡人社
 篠田義明(1986)『コミュニケーション技術』中公新書
 諏訪邦夫(1995)『発表の技法 計画の立て方からパソコン利用まで』講談社
 東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会(1995)『日本語 口頭発表と討論の技術ーコミュニケーション・スピーチ・ディベートのためにー』東海大学出版会

【資料】(口頭発表の文字起こし資料)

使用する符号の意味

*****: 学生の個人名を伏した。

/, //, ///: ポーズの長さを表わす。それぞれ0.2, 0.5, 0.8秒程度である。

それ以上の場合、例えば1.2秒程度なら(P1.2)のように表記する。

。 , : 発話中の句読点は、読みやすさのためにつけたもので、ポーズではない。

[] : わかりにくい音声で発音された語の本来の意味するところを示す。

{ } : 笑い声や動作など

↑ : 上昇イントネーション

? : 聞き取りできない部分

録画1「金沢大生の通学方法」

こんにちは。///私は/タイの*****です。(p1.1)これから金沢大学への//通学/方法について/発表を話します。(p1.9) 題目。(p1.2) 金沢大学の/大学生の/大学への/ついでに [通学] 方法が/便利だ便利ですか↑不便ですか↑/また/もっとも/あー/大切な/変数/が/何か/を/ちっ//を知りたいと思って/しゃん, あーしゃ [調査] としました。(p9.0) 金沢/大学の大学生//の50人///を///あー///インタビューをしました。(p1.7) 男の人は-62%です。女の人は-, 38%です。(p9.3) {OHPの用意} この地図は//金沢市のです。(p1.7) これは (p1.1) あー角間キャンパスです。あーこ

こ、これは一私たちがよく行きます。//あージャスコです。(p 2.2) {聴衆笑い} これ/これから///あーこれ、これまであー//り、りょうはん〔2キロ半〕ぐらい/です。//こういう所です。(p 2.0) アンケート結果から (p 1.1) あー学生のうち (p 1.2) 学生のうち/は一どこか知ります。//だからーそのあとで///あーこの点を書きます。///これは学生のうちです。(p 4.3) この辺はー (p 1.1) 学生のアパートが//いっぱいです。(p 1.7) この表を見てよくわかります。(p 3.4) これはアパート、これは自宅 (p 2.6) あー (p 1.9) あー金沢のこ、ころうち? あーこ///このー//この辺はー//学生の住んでいました。遠いです。遠いです。(p 10.3) {途中聴衆笑い} あー/通学方法はたとえば (p 1.4) 歩いて (p 2.1) て/自転車で (p 1.4) バイクで (2.0) あーバスで (1.4) 自動車で (1.9) 電車で (p 9.2) 春や夏や/秋はー (p 1.2) こうがく〔通学〕/方法///全部同じです。でも (p 1.0) ふぐ〔冬〕はーちかいます。(p 1.8) ふぐ〔冬〕//にのる〔なる〕/のるのるとー///あー///のるとー交通通学方法がーいつも/困ります。ですからー/このレポートは (p 1.1) 冬/を//冬、冬のとうがく〔通学〕方法を/調べます。(p 14.2 OHPシートの準備?) この表はー金沢大学の/学生の意見です。(p 2.0) これはー (p 1.1) 便利な/便利だと思っ/ている人です。///これは不便だと思っ/ている人です。///便利な、便利だと思っ/ている/人ーは///あーぜ/あー/全体の半分です。(p 8.1 OHPシートの準備?) 私/あー//自動車を持っ/ている/学生の方が/便利だと思っ/ていると/私は思っ/います。//だから//こりょう/この/この//表を作っ/てみました。(p 5.7) これはー (p 1.5) 自動車ーや/バイクで来る (p 1.1) 人です。(p 1.4) これはー//バスで来る人です。(p 2.9) これはー///自転車/や (p 1.1) 歩いて来る人です。(p 1.6) これはー/電車///きる人です。(p 2.7) ひたは〔下は〕 (1.0) 不便だ///と思っ/ている人 (p 1.2) あー上は///ふ/あー便利だ///と思っ/ている人です。(p 2.2) じど/自動車や///バイクで来る人の中には///便利だと思っ/ている人が///あーはっ/せんせんたい〔全体〕の約80パーセン/です。(p 1.2) だからー/とても便利だと思っ/います。(p 2.0) バスで行く人は (p 1.6) あーだいたい//便利だと思っ/います。(p 1.6) 電車で//自転車//で/歩いて来る人が//あーたぶん//今//困っ/てい、困っ/ているようです。(p 6.2) あーん///いん//インタビュー//した/した学生が//あー50人だけです。でも///あー/角間キャンパスが/か、かるまキャンパスの学生が2500人ぐらいですから (p 1.2) あー/もっと多いほうがいいです。(p 2.1) 私/のれ、れぼんど〔レポート〕/のよる//よるに///あー一番//大切な/変数は (p 1.1) のーりもの//とい、いうことです。(p 1.2) それで終わらましよう。

録画2「金沢大生の行ったことのある外国について」

はいみな、こんにちは。(p 9.5) あー今日私が話したいタイトルは//金大生金沢大学//の学生/いたことがある外国です。(p 1.6) 学生のアジアについての一般ちせき〔知識〕が//あるかないか/知りたーいと思っ/て調査しました。(p 4.0) 調査はー (p 7.3) 金大生インタビューして/アンケートを取りました。(p 1.5) 結果は (p 3.2) 46なんぼ/よん//じゅうろく//パーセントの学生は外国へ行ったことがないですか (p 1.1) あーのー//この中のー (p 1.1) 75%の学生は/ヨーロッパ行きたい//と言っ/ています。(p 2.0) 外国へ行ったことがあるい (p 2.2) はあーのー/54%/です。(p 5.4) 日本では (p 1.1) 金大生もー (p 1.4) 行ったことがあるの外国はアジアが一番多くて//次は/ヨーロッパです。///どうしてアジアが//人気//一番 (1.2) あるでしょう。(p 1.6) それはじかくてー〔近くてー〕 (p 2.4) してっ/いる〔知っ/ている〕人がいるしー/ぶか〔物価〕も安い//からです。//でもヨーロッパ行きたい人は/ヨーロッパの文化//歴史 (p 1.1) 古代遺跡などを見たいと言っ/ました。(p 2.1) 旅行の理由は (p 5.3) 77%の学生は外国の文化が///一番おもしろいと言っ/ました。///次は//買っ/い物するこつで///安いでしょ (p 1.0) でも//外国の政治とか//経済とか/少ししか知らないと言っ/ました。(p 1.1) その国のこつを///よく知らないのに///いてみたいというのは/変だと思っ/います。//でも//知らないから//行きたいのかもしれません。(p 4.2) 私は日本へ来る前に (p 1.5) マレーシアでは日本人の学生とー

こりゅー〔交流〕していました。その時//日本人の学生の国際感覚をよくわからないと思いました。(p 1.2)彼は/マレー語//を勉強/していたのに///マレーシアのことをほとんど知りませんでした。(p 1.3)マレーシア人には///マレー系/中国系/インド系と他の/マイノリティー/がいることとか//いろいろな/しょうぎょうかい〔宗教が〕///あるという日本的なことも彼では/知りませんでした。//びっくりしました。(p 1.6)?????パートは//日本経済/アジアについての中で— (p 1.3)日本人の大学生は//いろいろな米国の (p 1.1) 政治とか/経済とか/よく/知っている (p 1.1) でもアジアの国は/たとえばマレーシア (p 1.1) どこ/にあるかよくわからない人も//いる/と言っています。(p 1.5)しかし/今日本では//留学生と///海外旅行者がだんだん/多くなって///インターネットの//ネットワークを使う人がおいて—//いろいろなとかいじょほが/簡単に入ります (p 1.1)そして///私のインタビューで//日本人に/アジアが人気があると///わかりました。///でも/人気と/情報が/違います。///だから///私は日本人の学生に/アジアの情報に/目を向けて欲しいと/思います。///どもありがとうございました。

Evaluation of Oral Presentations by International Students

Kanae MIURA and Nozomi FUKASAWA

ABSTRACT What makes an oral presentation clear to the audience? The audience (21 native Japanese speakers) was divided into two groups, A and B. Group A watched two video taped oral presentations given by International students. Group B watched two other video taped presentations performed by one Japanese native speaker using the same script as Group A without modification except for her pronunciation. After watching the video they were interviewed. From the results of the interviews we have come to the conclusion that : 1) Pronunciation (including pitch, pause, prominence, intonation, etc.) takes an important role. 2) The marker to show where to begin each section like the main theme, discussion, and conclusion should be stated distinctly to make the structure of the presentation clear. 3) High evaluation is given to the presentation if the audience feels they “have understood” it. 4) To make the presentation “understood”, it is not necessarily essential that the audience get the content clearly but it is important for the speaker to have an impressive point which attracts the audience’s sympathy, or to make the conclusion part impressive. How to apply this conclusion to our six-month intensive Japanese course for beginners is also discussed.